

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

【図書紹介】 『ショーペンハウアーとともに』 ミシェル・ウエルベック著 アガト・ノヴァック=ルシュヴァリエ序文 澤田直訳
国書刊行会 二〇一九年

KIMIJIMA, Yasuaki / 君嶋, 泰明

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

72

(終了ページ / End Page)

72

(発行年 / Year)

2021-03-30

【図書紹介】

『シヨールペンハウアーとともに』

ミシエル・ウエルベック著、アガト・ノヴァツク・ルシユヴァリエ
序文、澤田直訳、国書刊行会、二〇一九年

君嶋 泰明

現代フランスを代表する作家によるシヨールペンハウアー論。『意志と表象としての世界』（一八一九）と『幸福について』（一八五二）からの抜粋（の仏語訳）と、その注釈からなる。訳者による用語解説と軽妙な訳業により、読者は大きなハードルなしに読み進めることができる。

本書はどちらかというと小品に属するが、凡百の注釈書にはない特色をもつ。それは、著者ウエルベックのシヨールペンハウアーへの傾倒たるや、ほとんど「同一化」（十一頁）と呼べるものであったらしい、ということである。序文にいわく、「苦痛の専門家であり、根っからの悲観主義者にして、孤独な人間嫌いであるシヨールペンハウアーを読むことは、ミシエル・ウエルベックにとっては、明らかに「元気が出る」読書なのだった」（同上）。ウエルベック自身は本書の目的をこう書いている。「自分の気に入ったいくつかのくだりを通して、なぜシヨールペンハウアーの知的な態度が、私にとっては来るべきあらゆる哲学の模範であ

り続けるのか、また、たとえ彼と意見が一致しない場合であっても、彼に対して深い感謝の気持ちを感じずにはいられないのかを示したいと思う」（三十一頁）。

シヨールペンハウアーとの出会いと別れ（後述）を短く回顧した後は、抜粋と注釈の応酬が全六章にわたり続く。なかでも「意志」の概念に迫る第三章は本書の山場である。「自然全体が、休息も目標もない、限界なき努力である」（八〇頁）ことを認めるとき、生全般がけっして報われない徒勞そのものであることが明らかになる。この不条理を額面通りに受け止めていながら、そのことを形而上学として語るシヨールペンハウアーにウエルベックは感謝を禁じえない。なぜなら、それは「人間の不幸の豊かな源泉である欲望の根を断ち切る手助けをしてくれるから」（一〇〇頁）である。しかし、シヨールペンハウアーはこうした一種仏教的な厭世観を標榜していながら、何食わぬ顔で「人生をできる限り快適で幸せにする技術」をレクチャーしている。本書はこの「幸福論」からの抜粋をもって唐突に幕を閉じている。もとよりウエルベックは、オーギュスト・コントとの出会い以来、自分がもはや生粋のシヨールペンハウアー主義者ではなくなっていることを表明している（先述の回顧）。読者はここで、このアンビヴァレンスと本書の途絶の意味を、ウエルベック自身のほかの作品に探るといふ宿題を得るのである。